



[神事に向う神職の光景](#)

令和2年4月5日、静岡浅間神社では、例年通り廿日会祭(はつかえさい)の稚児舞が演じられました。

現在、静岡浅間神社で奉納されている稚児舞は舞楽の一種で、日本では大阪の四天王寺が発祥ではないかとされています。四天王寺の舞楽は、聖徳太子が百済からもたらしたと伝えられています。

廿日会祭は4月1日から5日まで各種行事とともに繰り広げられています。中でも5日の例祭は、「国記録選択無形民俗文化財」(記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財)に指定され稚児舞が奏せられております。

残念ながら今年の廿日会祭は、新型コロナウイルスの影響で、規模を縮小して執り行われました。

上掲の写真は、廿日会祭の神事に向かう神職の列です。その手前左側の子供たちが、当日、稚児舞を舞う稚児たちです。遠く正面に見える建物が社務所です。



[稚児舞の稚児](#)

この稚児舞は正式には稚児舞楽と称し、現在では全部で5演目舞われ、4人の稚児が交替で奉じています。

山科言継の日記である『言継卿記』には、旧暦2月18日建穂寺の観音会の稚児舞と通常20日の予定が安倍川の増水で稚児が安倍川を渡れず、2日遅れで静岡浅間神社で奏でられた模様が記されています。

建穂寺で舞楽の一種の稚児舞が、いつ、どのようにもたらされたかは伝承の域でしかありませんが、服織で養蚕機織を営んだ渡来人の秦氏が関係しているとか、常行三昧の仏事に関係しているとか、18日は観音菩薩の縁日にもあたるのでその関係ではないかなど様々で定説はありません。

上掲の稚児ひとりの写真は安摩、二の舞という演目で、稚児のみ二人で舞っています。この後、笑面と腫面を着けた翁と婆が登場します。



[廿日会祭稚児舞](#)



[安摩、二の舞の爺と婆](#)

上掲の写真は、安摩、二の舞の演目における爺と婆の演技で、「ずじゃんこ舞」とも言われています。爺と婆が登場すると、バックグラウンドでの太鼓などの拍子が軽快となります。「ずじゃんこ舞」はこの拍子からきているとも言われています。この爺と婆の滑稽な舞を観て稚児が笑うと不作になるとの俗信があります。

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男